

言語のアイデンティティーの問題に関する小論

フローリアン・クルマス（ドイツー日本研究所）

本論文ではアイデンティティーの二つの側面を論じる。(1)書記体系と言語のつながり、(2)書記体系と集団アイデンティティーによって言語に付されるアイデンティティーである。書記は複雑に結びついたアイデンティティーの多層を触発するもので、この二側面は互いに関係していると主張する。この論文の見解では、アイデンティティーは自然に与えられるものではなく、選択の対象となる人工的なものである。ただし実際の選択は、様々な個人的または集団的行為に関わる要因により制限される。人間の振る舞いは身体的、精神的、社会的決定要素の支配下にあるが、自己の行動に対して責任を取ることは私たちの自己概念の重要な構成要素である。私たちは、ちょうど一方のグループに属し他方のグループとの関係を絶つことができるように、自ら行動を起こし、そして、その行動をどのように遂行するかを決定することができる。過去の遺産は強い強制力として働き、多くの人々にとって避けられないものであるように思える。しかし、人間としての私たちの自己理解のためには、人生は、遺伝的なものであろうと伝統的なものであろうと、引き継がれたものによって既に前もって決定されているのではないことを主張しなければならない。書記体系は最も明白なアイデンティティーのしるしであり、それゆえ変化しづらいものである。書記の改革案が常に懐疑や反対にさらされるのは、この理由からである。それにもかかわらず、書記の改革は過去に実行されてきたし、それは口頭言語の文字化は言うまでもなく、綴りの改革や別の書記体系への変更も含んでいた。この明白な事実から導かれる主な結論は、選択が原則として可能であるだけでなく、アイデンティティーを決定し、永続させ、変化させる上できわめて重要な役割を担っているということである。書記体系は言語よりももっと明らかに人工的なものであり、それゆえアイデンティティー構築の道具となる。本論文では、意図的な書記に基づくアイデンティティー形成の事例をいくつか考察し、書記が集団的記憶のためにどのように使われるかという問題を議論する。 (pp. 3-12)

バイリンガル習得：言語機能の限界を探って

フレッド・ジェネシー（マギル大学）

バイリンガル獲得研究は Ronjat (1913) や Leopold (1939-1949) に始まる歴史があるが、研究が盛んになったのは 1980 年代になってからのことである。

1980年代後半には、Misel, De Houwer, Lanza, Vihman 等による研究に代表されるように、バイリンガル獲得への関心が高まった。バイリンガル獲得が注目されるようになった背景には、いくつかの要因がある。第一に、2つ以上の言語を獲得していくことがそれほど珍しいことではなく、モノリンガル児と同様かそれ以上にバイリンガル児が存在するであろうと認識され始めたことである。従って、バイリンガル研究自体に価値がある。第二に、現在の言語獲得理論は概ねモノリンガル児を基盤にしているが、より包括的な理論となるためには、バイリンガル獲得についても説明されなければならない。さらに、バイリンガル獲得研究は、人間のもつ言語獲得能力を理解する上で非常に大きな貢献をするであろう。本論文では、以下の2つの大きな研究課題について、著者の研究を含む最近の研究成果に基づいて検討する：(1) バイリンガル児は、初期段階ではモノリンガルであるのか、(2) バイリンガル獲得は、モノリンガル獲得と同様であるのか。(pp. 13-30)

日本語のレキシコンとアクセント

窪 蘭 晴夫 (神戸大学)

本論文では日本語(東京方言)のアクセント体系を再検討し、この体系が次の2点において、一般に考えられているほど複雑なものではないと論じる。(1)レキシコンでアクセント指定を受けているのは一部の形態素や語だけである、(2)外来語アクセント規則や複合語アクセント規則をはじめとして、多くの規則が一つの一般的な規則に統合できる。この新しい分析は、単純語と複合語の両方において、規則で予測されるアクセント型と語彙的にマークされるべきアクセント型を明確に区別することによって可能となる。

(pp. 31-42)

生成生物言語学から見た言語進化の局面

藤田 耕司 (京都大学)

ミニマリスト・プログラムを理論背景にして展開される言語の生物学的研究(生成生物言語学)では、ヒトの言語能力を構成する諸機能のうち、種固有性・領域固有性が認められるものは唯一、回帰的な統語演算能力だけであるとされる。このことから、言語の起源と進化をめぐる主要問題は、その統語演算能力の前駆体は何であり、それが他の諸機能とどのようにして連結し

たのか、の2点に絞られることになる。本稿では、前者の問題に関して、物体の系列的操作に関わる「行動の文法」と、二項併合による統語構造の構築プロセスの間の形式的平行性に注目して、統語演算の前駆体の候補として身体的運動機能を想定する可能性を理論言語学的に検討する。 (pp. 45-58)

誘出法による日本語、英語、韓国語の空間言語習得の測定

布施 明子 (ニューヨーク市立大学ブルックリン校)

ロレーン・マクドノー (ニューヨーク市立大学ブルックリン校)

本研究の主な目的は誘出法を使って日本語を話す子供と大人の空間言語習得について調査することである。日本語の空間のカテゴリー化に関するデータを、Bowerman(1996, 2001)とChoi(1997)によって収集された英語と韓国語のそれと比較する。その結果、日本語のデータは英語よりも韓国語のデータと似ていたが、日本語独特の特徴もいくつか現れた。3言語の比較の結果、いずれの言語においても同じ度合いで、子供は空間的な言語を過度に拡張して使用することがわかった。また、空間言語の習得における大きな困難点のひとつが、空間的な関係のどの要素(例えば、物と物の適合の度合い、付着のタイプ、1つの物を他のものに対して動かす際の動作の経路や様態)が習得中の言語に関連するかを発見することであることを示している。

(pp. 63-78)

日本語獲得初期における格助詞の省略

平川 眞規子 (文教大学)

大嶋 百合子 (マギル大学)

伊藤 恵子 (東京未来大学)

日本語では主語や目的語の省略が許され、また動詞の項となる名詞句に付く格助詞も日常会話では頻繁に省略される。本稿では、主格と目的格の省略現象から項構造の獲得について検討する。文法原理によれば、他動詞や非能格自動詞の主語(すなわち外項)に付く主格「が」は省略されないが、非対格自動詞や状態動詞の主語(すなわち内項)に付く主格「が」は省略され得る。日本語を母語とする幼児の自然発話データを分析した結果、先行研究でも示されているように、子どもは日本語の格助詞省略を規定する文法原理に従うことが確認された。しかし、親のインプットと子どもの発話に見られる格助

詞省略のパターンを調べたところ、両者は概ね類似していた。この点は、子どもとおとなの言語において、非対格自動詞に付く主格「が」の省略に大きな差異があると唱える Miyamoto, Wexler, Aikawa, and Miyagawa (1999) とは異なる。(pp. 79-91)

日本語の語りにおけるストーリーライン構成能力の発達：主題化とアスペクト表示の獲得を中心に

車田 千種 (東京大学)

藤井 聖子 (東京大学)

本稿は児童の語り(narratives)を構成する能力の発達について考察する。日本語話者児童(5、7、9歳)と成人の語りのデータについて、節を(1)主語の主題性、(2)述語のアスペクトの点から4つに分類し、年齢群ごとの使用パターンを分析した。その結果、5歳児群では主語の主題化やアスペクトの用い方に大きな個人差が見られたが、7歳児群では特定の登場人物を節の主題化主語とし、述語でその動作や変化を描写する構造の節が安定して用いられていた。そのことにより、語りに中核的なストーリーラインが形成されていた。また、9歳児群および成人の話者は、物語の前景・背景や複数の登場人物の役割を、4つの節のタイプを区別し、組み合わせて使用することによって表現していた。こうした観察から、語りに見られる節の構造と機能が、話者の言語能力・談話構成能力と強いつながりを持って発達し、結果として各年齢群の語りを特徴づけていることが示唆された。(pp. 93-108)

可算統語不在の可算性：日本語における数量判断からの証拠

稲垣 俊史 (大阪府立大学)

デビッド・バーナー (カリフォルニア大学サンディエゴ校)

本研究では、可算・不可算の区別を持つ言語(英語、フランス語)と助数詞言語である日本語における数量判断を比較し、可算・不可算統語と個々の語の意味との相互作用を調査した。英語話者、日本語話者とも、物質を表す名詞に関しては量に基づいて判断した(例：大きな2盛りの歯磨き粉が小さな6盛りより多くの歯磨き粉であると判断した)が、可算名詞(例：靴 'shoes')と物体を表す不可算名詞(例：家具 'furniture')に関しては、数に基づいて判断した(例：小さな家具6点が大きな2点より多くの家具であると判断し

た)。英語において可算にも不可算にもなる名詞(例：ひも ‘string(s)’)に関しては、英語の数量判断が可算・不可算統語によって変化した(つまり、可算統語の場合数に基づいて判断され、不可算統語の場合量に基づいて判断された)のに対し、日本語の数量判断は、およそ50%が数に基づくものであり、英語の可算統語と不可算統語の判断の間であった。英語では不可算であるがフランス語では可算である名詞(例：ほうれん草 ‘spinach’)に関しては、この両語間で可算・不可算の違いにより数量判断が変化したのに対し、日本語の数量判断は主に数に基づいており、フランス語の判断に近かった。この結果から、可算・不可算統語は個別性を示すのに必須のものではなく、普遍的に存在する語の意味の中から特定のものを選ぶ働きがあると考えられる。
(pp. 111-125)

5 言語における物体と動作の線画命名：方法論上の示唆

ジセラ・ジア (ニューヨーク市立大学リーマン校)

布施 明子 (ニューヨーク市立大学ブルックリン校)

ジェニファー・チェン (ニューヨーク市立大学リーマン校)

ヘヨン・キム (ニューヨーク市立大学リーマン校)

フランシア・アキノーガルシア (ニューヨーク市立大学リーマン校)

線画命名課題が、異なる言語や多言語グループにおける語彙処理の研究に用いられる際、異言語話者によって明確に認識され、命名される絵を使うことが重要である。本研究は、そのような絵を特定し、方法論上の問題を明らかにしようとする試みの第一歩である。英語母語話者が正確に認識・命名した114個の物体と84種類の動作を選び、それらを他の4言語(日本語、韓国語、北京語、スペイン語)の母語話者51人に命名させた。その結果、ある言語で明確に認識される物体・動作が、他の言語ではそれほど明確に認識されない場合があることが示された。これは表された物体・動作の全体や部分の親密度に関する文化的要因、または、ある特定の動作を表す語が存在するかどうかという言語的要因に起因する。さらに、物体の命名のほうが異言語間での同一性と一定性が高かった。このことは、名詞のほうが普遍的に特定されやすいという可能性を示している。この結果から、異言語・多言語研究において絵を使用する場合、このような文化的・言語的要因をまず統制する必要があると言える。さもなければ、命名によって示される語彙処理能力は、それが正確さであろうと反応時間であろうと、語彙の検索・産出以前の項目を特定するプロセスに大きく影響を受けてしまうであろう。(pp. 127-141)

年少英語学習者の多読行動の変化

バトラー後藤 裕子 (ペンシルバニア大学)

岡澤 永一 (暁星小学校)

このケーススタディは、英語を外国語として学習している熟達度の異なる小学生が、外国語での多読にどのように取り組んだか、その行動変化を分析したものである。児童の読書行動を、1年間にわたり、教師による観察と児童への聞き取りによって調べた。概して、外国語で「読む」ことに取り組めるようになるのに、1学期ほどかかった。英語の熟達度の高い児童は低い児童に比べ、多読を短期間で受け入れ、集中度も高く、興味を持って多読に取り組んでいた。児童と教師からのデータを量的、質的に分析した結果、興味深い洞察がいくつか得られ、そこから、児童(とくに熟達度の低い児童)が、自分で本を選び、多読に興味を持ち、テキストをプロセスできるようになるには、多読実施初期の段階での支援が重要であることがわかった。

(pp. 145-161)

学習者の話技能に関する教師評価とピア評価：類似性と差異性

萩原 章子 (アイオワ大学)

ピア評価はこれまで第二言語の授業活動の一環として頻繁に取り入れられてきた。しかしピア評価が学習者の話技能の向上にどの程度寄与しているのかに関しては、明確にされていない部分が多い。本稿は、教師とピアがそれぞれ、大学で日本語を学ぶ第二言語学習者の話の中に見られる間違いをどのように評価するのかを検証する。実験の結果、教師とピアの評価は、学習者の発音とイントネーションを除いては統計的に有意な差は見られなかった。しかし、ピアは教師と比較すると指摘できる間違いの量が少ないことも明らかとなった。ピアは学習者の全般的な話技能を評価することができる一方、学習者の間違いに対して適切な答えを提示することは困難であることが示唆される。

(pp. 163-175)

英語語末子音オンライン借用に影響を及ぼす音声的、並びに他要因

金子 恵美子 (ウイスコンシン大学ミルウォーキー校)

グレゴリー・アイバーソン (メリーランド大学先端言語研究所)

本研究では、英語語末破裂音の日本語への借用に影響を与える要因を、オンライン借用実験(実験の場で造語を借用する実験)によって検証した。近年の借用語における音韻論研究には、主に2つの見方が存在する。原語音声の категорияは借用言語でも維持されるというもの (category preservation) と、原語音声は最も近似した(と知覚される)借用言語の音声として借用される (perceptual assimilation) というものである。本稿では、後者の見方が示すように、短母音に続く語末破裂音の重複子音化(例: 'hat' > ハット、[hatto])は主に原語音声の性質と、日本語話者の知覚とに起因すると論じ、加えて綴り字と、それに対応する発音についての日本語話者が持つ知識、日本語の音韻的制約等が、この知覚に基づく借用に干渉することを、実験により示した。また、知覚音位転移 (perceptual metathesis) の発生により、語末破裂音の借用は、借用者の知覚に拠ることが更に裏づけられた。

(pp. 179-195)

終結性、動作主性、語彙情報：日本語の移動事象と「ている」形

小池 祐子 (茨城大学)

本論文では、日本語の移動動詞の「ている」形における解釈について考察し、「ている」形において継続と結果の二つの解釈が可能である経路移動動詞にフォーカスを置く。この継続と結果の二つの解釈の有無は終結性と項の役割に起因しており、動作主主語と継続の解釈、そして主語にもたらされる変化と結果の解釈の間に明らかな関連性があることを示す。さらに、語彙情報が移動事象の解釈に大きな役割を果たしており、潜在的な事象の参加者がアスペクト的な意味によって表されることを示す。したがって、「ている」形における継続と結果の解釈を決定づけるのは、時間的要因であると同時に意味的要因によるものであり、これらの要因は語彙情報と相互作用している。

(pp. 197-211)

日中語の名詞修飾構文の機能類型論：パラレルコーパスの分析に基づいて

王 路明 (マインツ大学)

堀江 薫 (東北大学)

プラシャント・バルデシ (神戸大学)

本研究は、パラレルコーパスの分析に基づいて日本語と中国語の名詞修飾構文の質的・量的相違を解明する。具体的には、日中語の名詞修飾構文の用法の分布の相違は、両言語の名詞修飾構文が異なる機能的な分布を有することであることを示す。この分布上の相違は、言語類型論の分野において提案されている「意味地図」(Haspelmath, 2002)、特に複文の「概念空間」(Croft, 2001)上の意味地図を援用することによって明示することができる。

(pp. 213-228)